

歐米諸國に於ける明治史料の 蒐集行脚

京都帝大講師 藤井甚太郎

一

私は約一年程の間に、英・獨・蘭・米の四國を飛脚式に忙しく駆け廻つて、外國に於ける明治維新前後の史料を見て來たが、それに就て感慨無量なのは、明治天皇の偉大であらせられる御事である。維新前後の日本の世界的位置は極めて微小なもので、常に英・米・佛等の強壓を受け、幕府の遣外使節の如きも、向ふへ行つては片隅に縮こまつてゐる状態であつた。ところが、さういふ時代の日本を腦裡に描いて、今度向ふへ行つて見ると、實に意想外に日本の地位は偉大なものと成つてゐる。此の微小から偉大への進展は、實に明治天皇の御一代に行はれたのである。私は其の事を痛切に感ずるにつけても、今更に天皇の御稜威を仰いで、忝さに涙のこぼれるのを禁じ得なかつた。

内地に居ると、何かにつけて自國の不足點が目について、却つて外國を羨らうと思ふ事もあるが、實際外國に乗込んで行つて見ると、事毎に日本の偉大な事を感じざるばかりである。明治時代の日本の發展は、誠に旭の昇るが如き勢ひで、假に傍觀者の位置に立つて考へると、恐ろしい程であるが、今や其の日本が先頭に立つて東方から西進せんとする勢を示してゐるのである。「光は東方より」の言葉を現實にせんとしつゝあるのである。我々はそれにつけても、明治天皇の御大業を偲び奉らざるを得ない。

今度の歐行の途中、私は先づコロンボに立寄つて、其の地の有名な寺を見に行つたが、寶物を一覽するつもりで上堂すると、意外にも其處に小さな額に入つた明治天皇の御像を拜見した。そこで其の夕、晚餐を共にしたコロンボ駐在の領事に其の事を話すと、有名な佛牙寺にも御畫像が掲げられてゐるとの事であつたので、どうして錫蘭の寺に明治天皇の御畫像があるのか其の原因を取調べて頂きたい、と依頼して其のまゝ英國に行つた。歸つてから同領事の報告書を拜見すると、日露戦役に、島民が頻に日本人を便にして、大帝を景慕して止まないの、佛牙寺へは立花俊道師、私の實見した寺へは柔道教師某が寄進したとの事であつた。日露戦役は我が日本にとつての意義ある戦役であつて、アジア民族の間には勿論、全世界に烈しい波動を興へたと云つてよい。今日はアデンあたりに行つて見ても、日本品専門の雜貨店が二三軒あるし、カイロにも日本貨の商館の外に、物産陳列館まで設けられてゐるが、是等は

皆、日露戦後の著しい進展を語るものである。

英國では先づ大英博物館へ行つて、年録を見たが、其中に日本の部の歴史が掲げてあるのは一八六〇年(我が萬延元年)以來で、明治に成ると、毎年必ず日本記事がある。年録の一年分は頁數にして大略七八百頁であるが、日本の部は其の五頁乃至十頁を占めてゐる。記事も頗る要領よく出来てゐて、それだけを翻譯して旨く繋いだならば、手頃な近世日本史が出来上りさうである。勿論、單に事實の記載だけではなく、世界の各方面から觀た論評を集めて書き添へてある。多くの中で、最も我々がヒントを得るのはタイムスである。これは幸に完全な索引が附いてゐて、一目瞭然である。私は約百冊以上のものを各年毎に繰つて調べて見たが、日本の記事が始めてタイムスに出て來るのは、一八一二年即ち文化九年ロシアとの通商條約締結の記事以來で、幕末に近づくに隨つて次第に其の量が増加してゐる。併し目立つて殖えてゐるのは日清戦後で、日露戦争以來は、更に一層の殖え方である。最近に至つては、寧ろ歐洲の列強以上で、之に依つて日本近時の發展が世界的であることが知られるのである。タイムス以外の新聞では、日本内地でも折々見かける倫敦畫入新聞が、明治の日本史を見る上に頗る參考に成る。それは記事よりも寧ろ畫の方であつて、明治初期の風俗を研究するには、日本の錦畫などに據るよりも捷徑でないかと思はれる程である。東京横濱間の鐵道開通式、十年の役に警部隊が横濱から船に乗込んでゆ

く時の光景などが、實によく書けてゐる。

次に英國議會の速記録を見たが、これが又日本の近世史を見るのに頗る便利なもので、日本關係の出來事に對して、どう云ふ論評が下されてゐたかを詳細に知ることが出来る。文久三年の英艦鹿兒島砲擊の際に於けるクーバー提督の處置に付ての議論などは約四十頁程を費して登載してある。日英同盟に關する議事が殊に詳記されてゐるのは勿論の事であるが、一層強く眼を引いたのは、明治天皇崩御の時の速記録で、當日は愛蘭關係の議事が少々あつた後で、哀悼の意を表する議事に移り、總理が立つて明治大帝の偉大な御事蹟について演述してゐる。讀んで見ると、總理は大帝を獨逸のウィルヘルム一世に比し奉つて御大業を頌へ、殊に我が英國とは光輝ある同盟をお結びになつたと申してゐる。

その外に又、有名な青書にも明治史關係の記事が多く出てゐる。これは英國政府から議會への報告書類として貴重な文献であるが、これで見ると英國では、明治六年に、日本の製茶業、製紙業、蠶絲業、鑛山事業等に大分調査の力を盡してゐた事が分る。其の外、日本の鐵道に關する調査書、商業事情に關する書類など色々のものがある。

なほ、私が調べて見て感心したのは、内閣記録課の文書館である。こゝには外務省の文書を集藏してゐるのであるが、日本に關係したものは一八五三年(嘉永六年)から一八七八年(明治十一年)までの書類

がある。何れも公使又は領事の手書で、毎冊二百乃至三百頁程に綴ぢられてあるが、それが約七百冊以上もある。中には明治八年の小笠原島事件調査書類、征韓論關係の書類、雲揚艦事件など重要事件の報告書も多く綴込まれてゐるが、一方では我々日本人の間ですら既に其名を忘れ去られてゐるやうな小事件までも、一々日本の新聞記事を翻譯して、報告書が出されてゐる。

二

英國の次には獨逸へ行つたが、此處でも明治史に關する資料は甚だ多く整理して保存されてゐる。又丁抹の博物館には明治三年八月に明治天皇が使節へ御交付になつた御親證書が出てゐる。和蘭にも日本關係の書類は多く整理されて残つてゐるが、明治時代のは外務省の特別許可手續を要するといふので見なかつた。長崎出島關係の書類は、一九一〇年に整理されて、現に文書館に保管されてゐる。次に米國では僅に一ヶ月しか滞在してゐなかつたので、十分に調査が出来なかつたが、古い新聞紙、又、上院議事録などを精細に見たならば、必ず得る所が多いであらうと思ふ。

以上申し述べるやうな始末で、私の今度の旅行では、豫期した程の大きな土産も持つて歸れなかつたのであるが、只一言申し上げたいのは、日本は餘りに國史が立派過ぎる爲か、國民が比較的國史に注意を拂はないやうに見える事である。英國などは國史に依る統一運動が甚だ盛で、殊に活動寫眞などを利用

して頗る效果的にやつてゐる。私は滯英中に「一家族」といふ映畫を見たが、これは英國の植民地を統一する思想を盛り込んだもので、中には Buckingham 宮殿を寫した場面なども出てゐる。つまり皆が英國を中心にして一家族として互に助け合つて行かうといふ意を寫したものである。海を越えた獨逸でも亦、國民統一運動は一層烈しく行はれてゐる。此の國でも私は活動寫眞を見たが、それにはフレデリック大王がサクソンの戰線を見て廻る場面があつて、繪幕へ大王の姿が現れてくると、觀衆は一齊に熱烈な喝采を送つた。大戰によつて打ちひしがれた獨逸は、今や獨逸民族の歴史を振りかへつて、強烈な感激に蘇り、國民共同の力で難局を打破せんと企てゝゐるのであつて、現に私が貰つた筋書にまでも「國難に當つて歴史を懷ふ」と書き出してゐるのである。なほ殊に私が深く感じたのは、文書館の堂々たる建物が、戰爭中の一九一六年に起工され、大戰後の疲弊時たる一九二三年に竣成してゐる事である。私は此の獨逸精神の現れを見るにつけても、我が明治時代、ひとり日本歴史の上ばかりか、東方の文明が西方を照らし初める第一歩を意味する明治の大時機を永遠に記念すべき何等かの事業（例へば文庫のやうなもの）を我々も後世に残すべきではあるまいかと痛感した。私は近く歐米を廻つて英獨諸國に於ける堂々たる記念館を見て來た關係上、一層之が實現を速かにして頂きたいと考へる。